

の目から」(高井貴一訳)、オードリィ・コバード、バーナード・クリック(編)『思い出のオーウェル』晶文社(1986)、p.290。

7. 同上、p.289。

8. 谷川俊太郎、徳永進『詩と死をむすぶもの』朝日新聞出版(2008)、p.21。

9. 「ヨハネの黙示録」共同訳聖書実行委員会(編)『聖書 新共同訳』Japan Bible Society(1987)、新約聖書; p.452。

参考文献

川端康雄『ジョージ・オーウェル——「人間らしさ」への讃歌』岩波書店(2020)。

佐藤義夫「「喜びはかくばかり」——心の傷跡」和洋女子大学『英文学会誌』第48号(2014)。

人は人を撃てない ～オーウェル『カタロニア讃歌』の一場面にみる～

西川 伸一

周知のとおり、17世紀イギリスの政治哲学者トマス・ホップズは「万人の万人に対する闘争」という有名な言葉を遺した。人間の本質について性悪説を主張したのである。「人間の生活は、孤独で、まずしく、陰悪で、残忍で、しかもみじかい」とホップズは書いた(204頁)。経済学は「ホモ・エコノミクス」(合理的経済人)を人間行動の前提としている。すなわち、人間は自分自身の効用極大化を利己的に目指して合理的に行動する存在だ、と経済学は仮定する。

性悪で利己的な人間たち——。だから極悪非道な犯罪はなくならないし、戦争も人類史の上で絶えたことはあるまい。気候危機を食い止めることも至難の業となっている。自分勝手ばかりがはびこり、人類の未来は暗いと悲観的に考えざるを得ない。

ところが、昨年(2021年)こうした人間觀を真っ向から否定する書籍の翻訳が刊行された。ルトガー・ブレグマン(Rutger Bregman)というオランダ出身の歴史家・ジャーナリスト・ノンフィクション作家が書いた『希望の歴史 人類が善き未来をつくるための18章(上・下)』(文藝春秋)である。原著は2019年にオランダ語で出版され、翌年に英訳版が出されている。英訳版タイトルは*Human-kind: A Hopeful History*である。

同書は「トマス・ホップズの見解は、これ以上ないほど外れだった」(上巻149頁)と断言する。そして、性善説の人間觀が正しいことの証拠をこれでもかと読者に突きつけていく。

たとえば、戦場で兵士たちは互いに敵兵を殺すために撃ち合うことに、だれも疑問をさしはさまないだろう。しかし、第2次大戦に陸軍大佐として従軍した歴史家のサミュエル・マーシャルは、兵士へのグループ・インタビューを何度も行って奇妙なことを見出した。「戦場で銃を撃つことのある兵士は全体の一五~二五パーセントしかいないことを知った」のである(上巻113頁)。

しかもこれは第2次大戦と米軍に限ったことではなかった。1860年代のフランス軍将校は、前線の兵士たちが両軍ともに敵兵の頭ではなくその上に照準を定めて撃ち続けたと証言した。あるいは「何でもいいから他の用事(略)を見つけて、銃を撃たない言い訳に」したという(上巻117頁)。

自分が撃たなければ殺されるという極限状態に至っても、人は人を容易には撃てないのだ。この「発見」を補強するために、ブレグマンは自らが「敬愛する作家」というオーウェルの『カタロニア讃歌』の一文を引用している(上巻118頁)。念のため、イギリスで2021年に出された『希望の歴史』のペーパーバック版(Bloomsbury Publishing)に当たったところ、オーウェルの原文が正確に引用されていた(p.85)。ブレグマンが引用したのはIn this war～の一文だけである。だが、そ

の文の理解を助けるため直前にある短文も合わせて掲げることにする。

However, the sentry missed him. In this war everyone always did miss everyone else, when it was humanly possible.

(George Orwell, *Homage to Catalonia* (London: Secker & Warburg, 1996), p.37.)

さらに文脈を説明すると、オーウェルが加わった義勇軍では仲間であると確認する手段として合言葉が使われていた。ある晩の合言葉は「カタルーニャ」 \longleftrightarrow 「エロイカ」だった。しかし無学な者には「エロイカ」(英雄)の意味がわからなかった。農夫出身の少年兵がオーウェルにその意味を尋ねた。オーウェルは「バリアンテ」(勇者)のことだと教えてやった。その後、真っ暗な塹壕で彼は歩哨から「カタルーニャ」と誰何された。彼は「バリアンテ」と答えてしまった。すると歩哨は撃つには撃った。だが、何が起こったかは上記のとおりである。

この場面の翻訳を各訳書で比較してみよう(並びは訳文の刊行順)。

鈴木隆・山内明訳(現代思潮社、1966年)38頁「しかし歩哨は射ち損じた。この戦争では人間の力で射ち当てられるような場合には、いつもだれの狙いもはずれた」。

橋口稔訳(ちくま学芸文庫、2002年(1970年に筑摩叢書として刊行された単行本を文庫化したもの))61頁「しかし、弾はあたらなかつた。この戦争では、人間の力で撃つかぎり、いつもだれの狙いもはずれた」。

高畠文夫訳(角川文庫、1975年)55頁「しかし、歩哨の射った弾丸は当たらなかつた。この戦争では人間わざで狙いが外れそうなときには、だれがだれを射つても、きっと狙いは外れるのだった」。

新庄哲夫訳(ハヤカワ文庫NF、1984年)50頁「しかしながら、歩哨の弾はそれでしまつた。この戦争では、人間の力に頼るかぎり、誰も彼もきまつて狙いがはずれるのであつた」。

都築忠七訳(岩波文庫、1992年)61頁「しかし歩哨は的をはずした。この戦争では、人間らしく的をはずすことのできるときはいつも、人は誰でも、そして誰にたいしても、射ちそこねるものだ」。

野中香方子訳(ブレグマン『希望の歴史(上)』)118頁「この戦争では、人道上許される場合は、誰もが誰かを撃ち損なつた」

“humanly”をどう訳すかで、訳者それぞれが苦労していることがうかがわれる。鈴木・山内訳、橋口訳、および新庄訳の「人間の力」とはどういうことなのか。銃は「人間の力」で引き金を引くほかない。それ以外の場合があるのかここで読みが止まってしまう。高畠訳の「人間わざ」も意味がよくわからない。都築訳の「人間らしく」がオーウェルの言いたかったことに一番近いのではないか。それまでの4冊の訳文を参照できた強みであろう。野中訳の「人道上」も悪くはないがやや大げな印象を受ける。

ともあれ人は人を撃てない。象は撃てたとしても。ここにもオーウェルの「人間らしさ」への讃美を読み取ることは、ロシアのウクライナ侵略を前に牽強付会が過ぎようか。

参考・引用文献(オーウェル『カタロニア讃美』を除く):

ブレグマン／野中香方子訳(2021)『希望の歴史(上・下)』文藝春秋。
ホップズ／水田洋訳(1954)『リヴァイアサン(一)』岩波文庫。